

## 第 2 回 SPARC Japan セミナー2014

「大学における OA ポリシー：日本版 OA ポリシーのモデル構築に向けて」

# エルゼビアにおける オープンアクセスの進展：最新情報

Anders Karlsson

(エルゼビア グローバル・アカデミック・リレーションズ)

### 講演要旨

「Science 2.0」フレームワークの一部としてオープンアクセスが急速に進展するにつれて、どのようなモデルが研究コミュニティにとって有益であるかを明確にし、理解することが重要になってきている。本プレゼンテーションでは、エルゼビアのオープンアクセス（テキスト・データ・マイニングを含む）についてのポリシーの概要を解説し、エルゼビアが助成団体および他の機関と締結している合意が研究コミュニティにどのように貢献しているかを紹介する。



### Anders Karlsson

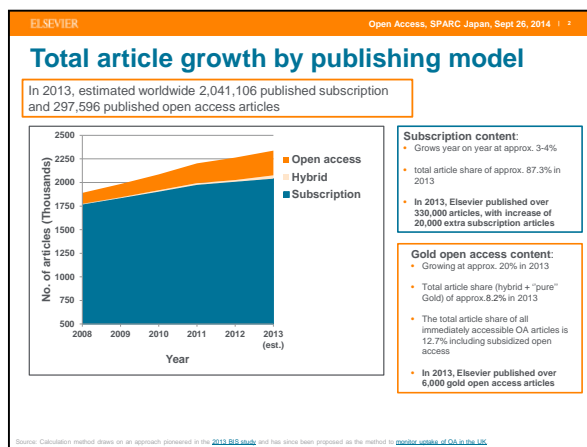
エルゼビア グローバル・アカデミック・リレーションズ 副社長。1992年スウェーデン王立工科大学量子工学博士号取得、NTT 物性科学基礎研究所研究員、スタンフォード大学 客員研究員を経験後、ポリテクニク工科大（フランス）、浙江大学（中国）で教鞭をとる。2001年から2011年スウェーデン王立工科大学 量子光学教授。2007年～2012年スウェーデン大使館 科学技術参事官を経た後、2012年11月より現職。大阪大学未来戦略機構の顧問も務める。

エルゼビアにおける近年のオープンアクセスの進展について、ご紹介します。三つのテーマを扱います。第一にオープンアクセス全般の進展、第二にエルゼビアの活動、第三に当社の機関リポジトリサービスです。

### OA 全般の進展

このグラフは、英国政府のため当社が実施した調査に基づくもので、全ての出版社のハイブリッドジャーナル、予約購読型ジャーナルのゴールド・オープン・アクセスの推移を示しています（図 1）。予約購読型コンテンツは世界的に 3～4%の割合で増加し、当社では 2013 年に約 330,000 本の論文を刊行しました。これは前年を 20,000 本上回る数字でした。ゴールド・

オープン・アクセス・コンテンツは、私たちの期待より速い成長速度で約 20%の伸びを示しています。エルゼビアでは、昨年約 6,000 本のゴールド・オープン・



(図 1)

アクセス論文を出版しました。

世界のポリシーについては、例えばアメリカでは政府機関がパブリック・アクセスに関するポリシーを導入する一方、出版社は CHORUS システムを、大学は SHARE システムを開発しました。アメリカは主にグリーンポリシーを採用していますが、欧州は混合型です。イギリスでは、ゴールド・オープン・アクセス・ルートが非常に重視されています。これはオランダも同じですが、混合型アプローチも見られます。アジア太平洋に目を向けると、中国や日本などはどのモデルを選ぶか議論が続いています。しかしオーストラリアは、12カ月間のセルフアーカイブを義務づけるグリーンポリシーを基本的に採用しています。

### **エルゼビアでの OA の進展**

当社では、研究コミュニティの関心に応じて刊行物や OA 出版を増やしています。例えば当社は現在、100 以上の完全 OA ジャーナルを刊行しており、当社が保有する全ての雑誌でハイブリッド・オープン・アクセスによる出版を行えます。グリーンアクセスについては、当社の全ジャーナルでセルフアーカイブが可能で、リポジトリの機関内であれば出版後すぐに利用でき、エンバーゴ期間が過ぎれば一般公開が認められます。当社は、様々なクリエイティブ・コモンズ・ライセンスを採用しています。当初は OA ジャーナル全てに同一の出版料金を採用していましたが、現在は変更しており 500~5,000 ドルとばらつきがあります。

OA ポリシーに関しては、助成団体といくつか合意を交わしていますが、グリーンオープンアクセス方式も存在します。世界銀行がその一例です。例えばウェルカム財団はゴールド・オープン・アクセス方式です。私たちは、研究を支援し、掲載プロセスが透明で、順守することが容易な優れた OA ポリシーを策定するため、助成団体との協力を望んでいます。ゴールド方式の合意に関しては、著者の投稿プロセスを簡素化できるようワークフローの支援に取り組んでいます。助成団体に対して、報告も行っています。

### **機関リポジトリサービス**

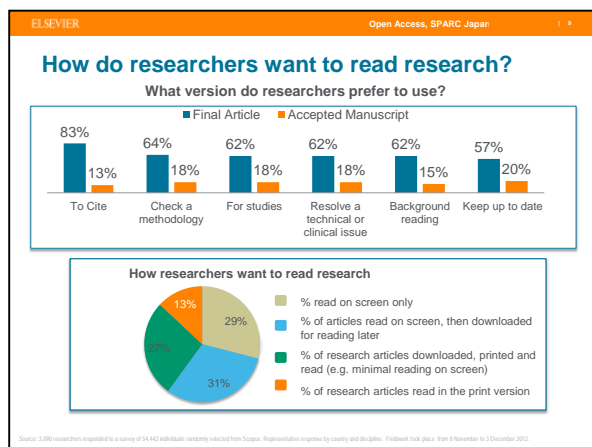
研究機関の OA ポリシーについて、三つの原則を紹介します。一つ目は、著者が自分で選んだジャーナルに掲載できるよう、学問の自由を尊重し推進することです。二つ目は、研究者が研究に時間を使えるよう、彼らの事務負担を極力減らすことです。出版社は研究エコシステムで貴重な役割を果たすため、インフラ面の重複を避け、既存インフラの活用にも努めるべきです。機関サービスについては、当社の現在の掲載ポリシーにはまず何よりも、リポジトリとの協力の方法が明記されています。現在、当社は三つのプロジェクトを進めています。第一に、発見可能性を高めるため、Scopus や ScienceDirect からメタデータをフィードするパイロットプロジェクトに取り組んでいます。第二に、フルテキストを埋め込んで閲覧できるようにするパイロットも行っています。先程の講演で、図書館が様々なエンバーゴ期間をどうやって確認するかという話が出ましたが、私たちは出版社のエンバーゴ期間を追跡し、期間終了時に自動的に論文を公開できるようにする方法を検討しています。

グリーンオープンアクセスの問題点については、第一に時間と労力が必要です。著者は、正しいバージョンを登録し、メタデータもリポジトリに登録する必要があります。よく無料だと誤解されていますが、無料ではありません。図書館が購読費を払っています。利用できるのはエンバーゴ期間終了後なので、すぐに公開されるわけでもありません。当社の場合、受理された著者原稿があっても、最終的に出版されたバージョンを出版社のウェブサイトに掲載すべきだと考えています。そこでは、追加の機能やデータを著者に提供することができます。皆さんが研究者の立場になれば、どちらのバージョンを読みたいと思うでしょうか。基本的に、読者は最終版を読みます (図 2)。

総括として 3 点述べたいと思います。第一に、当社は OA 出版社です。オープンアクセスを積極的に支持し、研究コミュニティに、好きな形式で好きなジャーナルに掲載できる選択肢を提供することを重視してい

ます。第二に、エルゼビアを代表して本フォーラムにお招き頂き、非常に光栄です。私たちは研究コミュニティとの協力に関心を抱いているからです。私たちは一つのエコシステムであり、助成団体や研究機関と協力して、研究者や一般市民を含む社会全体のため、優れた解決策を考案したいと考えています。

リポジトリに関する私の論点三つを要約すると、研究者が自分で発表の場を選べるよう選択肢と自由度を極力増やすべきだということ、研究者の事務負担を減らすこと、様々なソリューションの考案に関し幅広い技術的知識を持つ出版社と協力すべきだということです。本日お集まりの皆さまは、私たちと同じくこうした課題に日常的な業務として取り組んでおられると思いますので、議論を続けてさせていただければ幸いです。ありがとうございました。



(図 2)